

臨床検査技師に求められる対患者・対多職種コミュニケーション

◎藤崎 和彦¹⁾岐阜大学医学部 名誉教授¹⁾

多くの医療職系教育でのコアカリキュラムにおいて求められる能力アウトカムの中に「コミュニケーション能力」や「多職種連携能力」が掲げられているものの、臨床検査技師教育の中ではまだまだその位置づけが十分とは言えない。コミュニケーション能力はある種の身体化された技能であるため、知識の上で「こういう時はこういった声掛けが望ましい」という事が分かっている、実際にいざ必要な時に自然とふさわしい声かけがタイミングよく口から出てこないという意味がないので、具体的な技能トレーニングとして医学部や歯学部、薬学部では模擬患者参加型の具体的な技能教育が行われているが、検査技師教育においてはまだまだそういった教育が不足している。

多職種連携に必要なコミュニケーションで、出発点として重要になるのは検査技師側のアサーティブネスであるが、「多職種の中で発言できる自分」「効果的に相手に伝えられる自分」に成れていないことも少なくない。実際の医療福祉系学生のコミュニケーションも見ていて気付く問題点は、1)学生の関心が現状の患者の身体状況や心理状態の把握が中心で、より全人的な患者の病いのストーリー（ナラティブ）をオープンに聴く訓練を受けていない、2)事前準備でステレオタイプの患者像を作りすぎてしまい、それを **closed question**（閉鎖型質問）で決め打ちに行って、空振りをした途端にどうしていいか分からなくなる、3)基本的な関係づくりが出来ないと、その先のアセスメントや介入にも進めない、4)簡単に「患者の不安を解消できる」と思いこんでいることが多いが、学生レベルで出来ることは患者の不安を傾聴、共感出来たら十分と考えるべきことなどである。最後に、医療福祉系専門職が陥りやすいコミュニケーション上の落とし穴についても論じている。

模擬患者参加型教育におけるコミュニケーション能力育成の意義

—医療専門職教育の視点から—

◎阿部 恵子¹⁾
金城学院大学¹⁾

医療専門職にとってコミュニケーション能力は、診療やケアのあらゆる場面に必要な基盤となる臨床能力である。患者と医療者あるいは、医療者間のコミュニケーションによる相互作用は、情報収集、情報共有、意思決定支援から治療の質に至るまで、大きな影響を及ぼすため、高度なコミュニケーション能力が求められる。従来の教育では、言語・非言語メッセージ、傾聴、共感、受容などスキルに焦点を当てた標準化教育が中心であり、初学者にとって有効である一方で、コミュニケーションが相互作用に基づく動的な営みであることを踏まえた教育実践は限られてきた。

看護学領域では、厚生労働省が看護実践能力の育成を目的として模擬患者(Simulated Patient: SP)やシミュレーターを用いた演習の拡充を推奨している。同時に、近年の人間関係の希薄化や生活体験の不足を背景に、体験的学習を通じたコミュニケーション教育の重要性が指摘されている。しかし、臨床検査技師養成教育におけるコミュニケーション能力の体系的育成は、未だ十分に検討されていないのが現状である。

SPを活用した演習は、単なる学生同志のロールプレイ以上に、患者理解の進化と臨場感のある学習環境を提供する。学生は適度な緊張感を伴いながら医療面接を経験し、患者役であるSPからのフィードバックを通じて、自らの言動が他者に与える影響に気づくことができる。このような経験学習は、従来の知識伝達やスキル型の教育では得にくい学習効果が期待でき、その有効性は先行研究で多く報告されている。

さらに、チーム医療においてもコミュニケーションはチームの成果を左右する要因である。SPを活用した模擬体験の中で、専門職種での情報交換や意思決定を体験することは、学生に多職種連携能力を涵養させる教育的効果を持つ。他職種に対する理解と共同の姿勢を育成する点で、臨床に先立つ重要な準備教育となり得る。

本シンポジウムでは、医学部および看護学部で実践してきたSP参加型教育を紹介し、その教育的効果と臨床での応用の展望を検討する。臨床検査技師養成教育においても、SP演習を取り入れることは、患者対応力および多職種連携力を備えた専門職育成に資する可能性が高いと考える。

苦手!?とは言わせないぜ！コミュニケーションスキルでダンジョン攻略！

◎植松 明和¹⁾
大東文化大学¹⁾

【はじめに】 私は今回のシンポジウムで難解な表題での発表を、宇城大会長より賜りました。学問としてのコミュニケーションスキルについては、不勉強であり、ENDCORE モデル (ENCODE (表現力)、DECODE (解読力)、CONTROL (自己統制)、REGULATION (関係調整)) の意味程度しかわかりません。そのため、病院で臨床検査技師として働いた 30 年間の経験を基に、コミュニケーションの重要性を説きます。

【ダンジョンに潜る前に】 冒険者のみなさんには、固有スキルのほかに 6 つのコミュニケーションスキル (表現力を表す表現力スキルと自己主張スキル、解読力を表す解読力スキルと他者受容スキル、更に自己統制スキルと関係調整スキル) があります。ダンジョン攻略のためには業務というクエストを経験し、各スキルのレベルを上げてください。そのために最も重要なことは、誰にでも使える基本魔術の「あいさつ」を詠唱することです。病院ギルドの臨床検査技師団メンバーの一人として、クエスト上の付き合いは重要です。仲間に裏切られたり、「後ろに気をつけろよ…」と言われたりしないよう、まずは団員の性格や特徴、固有スキルを把握してください。基本魔術「あいさつ」の詠唱は、相手に対し自分の印象操作をするとともに、自分自身にはバフ (相手が話しやすいように自身のハードルを下げる) が発動します。団員からの情報収集が容易になり、解読力スキルと他者受容スキルとともに関係調整スキルが爆上がりします。詠唱しなければ、自動的にデバフ (話かけにくい) が発動し、行き過ぎると強力なデバフ (孤高の存在や陰キャ認定) が発動する場合もあるので注意が必要です。なお、自己統制スキルとは、自分をコントロールする超基本的なスキルとなります。このスキルが向上しない限り、他のスキルが爆上がりすることはありません。

【第一階層：対ルーチンワーク】 臨床検査技師団内では各パーティーが分担してクエストを受注するシステムになっています。主には 2 つのパーティー活動に分類され、クエスト依頼者 (患者) から採取した血液、尿、組織などのサンプルを主に取り扱う検体検査パーティーとクエスト依頼者自体をサンプルとして取り扱う生理検査パーティーがあります。また、採血クエストについては、現在約 50% 以上のギルドにおいて、臨床検査技師団が中心となって担い、採血専門パーティーや各種パーティーメンバーからパーティーを編成する場合があります。第一階層のルーチンワークと戦う上で、クエスト依頼者である患者、依頼発注者である医師、看護師パーティーメンバーとの接触が頻繁にあります。その際、基本魔術「あいさつ」は通信機器および対面を問わず必ず詠唱してください。また、話した内容については記録を取ることが吉です。対ルーチンワーク戦では、各冒険者の固有スキル (心エコー使いなど) を駆使し、パーティーメンバーで協力して、クエストを達成してください。その際、共闘してくれたパーティーメンバーへは労いを示す基本魔術「ありがとう」を詠唱してください。基本魔術は MP 消費量 0 のため、何度使用しても構いません。表現力スキルや他者受容スキルが向上します。

【第二階層：対多職種連携ワーク】 ICT、NST、糖尿病教室など、臨床検査技師団、看護師団、薬剤師団、栄養科団などから選ばれた団員が参加して、医師や事務局員と共にスペシャルパーティーを作り共闘します。各団員はそれぞれその分野に長けたスペシャリストが参加するので、作戦会議では、それぞれの代表者が意見を持ち寄り、最善のクエスト対策を検討します。その際、われわれ臨床検査技師団から選出された団員は、選ばれたメンバーであることに誇りを持ち、積極的に議論に参加してください。スペシャルパーティーに参加できることは、光栄なことです。作戦会議で積極的な議論を交わし、特別クエストをコンプリートできると、表現力スキル、解読力スキルの向上、時に自己主張スキルと他者受容スキルが爆上がりし、個人だけでなく所属して

いる師団も評価されます。スペシャルパーティーメンバーをよく観察し、上手に立ち回る術を磨いてください。

【第三階層：対学会】 攻略については本シンポジウムクエストで。これであなたも S ランク冒険者！

海の向こうへ Let's Go！医療人としての大冒険！

◎浦 みどり¹⁾

学校法人 神戸常盤大学¹⁾

私が今回頂いた、この躍動的でワクワクするようなお題に沿って、臨床検査技師を目指している皆さんの将来像に、少しでも多くの選択肢が加わるよう、多様なキャリアパスと可能性を交えて、シンポジウムでは海外での活動経験についてご紹介したいと思います。

皆さんは「海外」と聞いて、どのような印象を持つでしょうか？少し遠くに感じられたり、英語に対する苦手意識を覚えたり、あるいは外国のことにあまり興味が湧かないかもしれません。しかし「コミュニケーションスキル」が生きる場面は、海外での活動に限りません。コミュニケーションとは、ある言語に対する語学力の高さとは異なり、日本語でも英語でも、それ以外の言語でも、仕事や生活をしていく上で必要なスキルの一つであり、これを上手に使っていくことで、より豊かで実りの多い人生になっていくのではないかと考えています。

私はかつて生理機能検査室の臨床検査技師として、患者様やご家族、医療スタッフとのコミュニケーションを大切にし、その重要性を日々実感していました。臨床を離れてからも自ら動いてコミュニケーションを取りに行くことで、国内外で多様な人々と出会い貴重な経験を得てきました。近年の国内活動では、能登半島での被災地支援が挙げられます。2024年元日に起きた能登半島地震により、今も苦しい生活を余儀なくされている方々が数多くいらっしゃいます。私は震災の後、ボランティアとして被災地の病院支援に入りました。臨床検査技師としての経験から、心電図や超音波検査など生理機能検査は即戦力として活動できる自信がありましたが、医療技術だけでは現場で役割を果たせない可能性もあります。例えば、医療機器が使える状態なのか、電子カルテシステムは稼働しているのか、また患者様は高齢者で慢性疾患が多いのか、それとも被災されて外傷を負った方々や災害関連の疾病が多いのか、加えて宿泊場所の環境や持参すべき食糧や日用品など「水道・電気・ガスの無い状況」とはどのような生活なのか、想像が付きません。上司や技師会からの事前情報は非常に役立ちましたが、「いつもの職場では当たり前」という前提が何も保障されていない中で自分の役割を果たせるのだろうかなど、次々と迷いが生じて正解が見つかりません。

それでも「まずは現場に行ってみよう」と行動を起こすのは何故でしょうか？この楽観的とも言える思考の根底には「分からなければ聞けば良い。むしろ現地の方々に聞かなければ、何が必要とされ、自分に何が出来るのかも分からない」と思うからでしょう。すなわち、現地の方々とコミュニケーションを取りながら現場を体感することで実情を理解し、必要なことが見えてきます。反対に、現場でのコミュニケーションを省いて事前情報のみで動いてしまえば「支援」ではなく、ありがた迷惑にもなりかねません。

さらに、コミュニケーションの良いところは、業務を超えた交流が生まれたり、その交流が未来に続いていったりする可能性を秘めていることです。被災地では多くの方々と関わらせて頂きましたが、その後も幾度となく学会などでお会いする機会に恵まれ、時が経っても能登半島地震の余波が続いていることを知り、支援の在り方や次の災害に向けての対策を自分なりに考えるなど、現地の方々とのコミュニケーションを振り返りながら、改めて貴重な機会と大きな経験を頂いたと実感しています。

このように、臨床検査技師のコミュニケーションスキルとは、患者様と関わる上で必要なだけでなく、現場のスタッフと効率的・効果的に業務を回し、さらには自分の欲しいモノを手に入れていくためにも重宝する、頼もしいスキルなのです。では、どのようにこのスキルを磨いていくのか？コストパフォーマンスが抜群に良く、最もお薦めの神器が「あいさつ」です。今、学生の皆さんには沢山のチャンスがあります。そして「今しか出来ない事」も沢山あるはずです。失敗

しても、何度でも挑戦できるのが学生の強みです。このチャンスを最大限に生かすために、少しでも勇気を出して「あいさつ」から始めてみれば、きっと新しい世界が広がると思います。今日から一緒にチャレンジして新しい世界を見にいきましょう。